

[覚書]

# 阿部展也が記したベン・シャーン

—ベン・シャーン《ペンを持つ手》を中心に

児矢野 あゆみ

新潟市美術館 学芸員

## 阿部展也が記したベン・シャーン

—ベン・シャーン《ペンを持つ手》を中心に

児矢野 あゆみ

### はじめに

ベン・シャーン (1898-1969) は、リトアニアに生まれアメリカで活躍した画家である。ユダヤ教徒であり社会主義者であった父が当時のロシア皇帝を批判したことが原因で、家族とともに8歳でブルックリンに移住した。14歳で叔父が営んでいたリトグラフ工房に入り、修行を積みながら夜間の美術学校に通い絵画の基礎を学んだという。独立してからは、主にグラフィック・デザインの分野で活躍し、1932年よりメキシコの画家ディエゴ・リベラ (1886-1957) のアシスタントとしてロックフェラー・センター・RCAビル (ニューヨーク) のメイン・ロビーを飾る壁画制作に携わり、のちに自身も壁画を手がけるようになった。

新潟出身の画家・写真家であり、新潟市美術館のコレクションのなかでも重要な位置を占める阿部展也 (1913-71) は、シャーンを日本でいち早く取り上げたことでも知られている。シャーンが1960年4月に京都・奈良を訪れた際にはアテンドを務め、同年10月には、ニュージャージー州ルーズヴェルトにあるアトリエを訪れるなど、深く交流を重ねたひとりである。

シャーンから阿部に対して、その友好の証に贈られた《ペンを持つ手》(1960年) が、2019年度に当館へ収蔵されたことをきっかけに、2020年には「丸沼芸術の森所蔵 ベン・シャーン展」を開催した。彼らの交流を紹介するコーナーを設けたことによって、阿部がシャーンに向けた眼差しを、より客観的に捉えることが出来たように思われる。本稿では、阿部展也が、ベン・シャーンという画家についてどのように語ってきたのかを、改めて考えてみたい。

日本におけるベン・シャーン受容については、次の2つの展覧会で大きく取り上げられている。2011-12年に福島県立美術館をはじめ4館で開催された「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート」展では、シャーンが日本に滞在した際に撮影した写真の数々が初めて紹介され〔註1〕、2018年に当館をはじめ3館で開催された「阿部展也 あくなき越境者」展では、阿部がシャーンについて執筆した記事の書誌情報がまとめられているので、それぞれの図録を参照されたい。

阿部がシャーンを知ったのは、1943年の暮れのことである。陸軍第十四軍宣伝班 (1942年7月に報道部に改組) の写真班員として徴用されフィリピンに従軍した〔註2〕ときに、老ドイツ人音楽家Hがクリスマスの贈物として「米國版ディエゴ・リヴェラ畫集」〔註3〕を受け取ったのがきっかけだったという。その画集について、阿部は「ベン・シャーン雜記」『BBBB』1950年3月号で、次のように記している。

「ディエゴ・リヴェラの傳記中に、ニューヨークのロックフェラー・センターの壁畫製作に關して、資本家と手をにぎつたリヴェラというやうな皮肉な諷刺畫が挿入されており (記憶に間違いがなければ、左にリヴェラ、右にロックフェラーが横向きに描かれ、おたがいの右手で握手し左手で自分の鼻の先に親指をあて掌をひらいて、相手をばかに仕合っているものでした)、壁畫製作の状態とそのてんまつが書かれたなかに、リヴェラの二人のアシスタントの一人として、シャーンの名が出ていたのでしたが、この奇妙な諷刺畫と、ベン・シャーンというおかしな響きの名がかさなって記憶に残っておりました。」

阿部が手に取った画集についてこれまで明らかにされてこなかったが、埼玉県立近代美術館で2017年に開催された「開館35周年記念展 ディエゴ・リベラの時代 メキ

註1 「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート」美術出版社、2011。所収の、李美那氏による「阿部展也の見たベン・シャーン」において、ふたりの交流が詳しく取り上げられている。

註2 「阿部展也—あくなき越境者」新潟市美術館／広島市現代美術館／埼玉県立近代美術館、2018年、p.39。

註3 「ベン・シャーン雜記」『BBBB』1950年3月号、p.4。

註4 埼玉県立近代美術館の平野到学芸員と新潟市新津美術館の松沢寿重館長によるやりとりのなかで判明した。



120・RIVERA AND ROCKEFELLER ("RECONCILIATION"), BY CHARLES GOELLER

図1 Charles Goeller (Rivera and Rockefeller ("Reconciliation"))

出典：Bertram D. Wolfe, "Diego Rivera: His life and times." Alfred・A・Knopf, 1939, fig.120

註5 Bertram D. Wolfe, "Diego Rivera: His life and times." Alfred・A・Knopf, 1939., p.xxvi. 「リベラは共産主義活動を絵にし、ジョン・D・ジュニアがその勘定を持つ！」という見出しが『ワールド・テレグラム』紙を飾った。(レム・コールハース著、鈴木圭介訳『錯乱のニューヨーク』筑摩書房、1995、p.381)

註6 前掲書、Alfred・A・Knopf, 1939, pp.354-376.

註7 阿部展也「ベン・シャーンと第五福竜丸」『藝術新潮』1962年10月号、p.91。

註8 前掲書、美術出版社、2012年。

註9 阿部展也「市民画家のみた日本」『藝術新潮』1960年5月号。

註10 藤慶之「ヒューマンイズムの画家 ベン・シャーン」『現代美術 第一巻 ベン・シャーン』講談社、1992年、pp.81-88。

註11 瀬木慎一、粟津潔「作家研究 ベン・シャーン」『美術手帖』美術出版社、1961年、p.56。

註12 「浅野竹二の木版世界」府中市美術館、2017年、p.34。

シコの夢とともに」を担当した平野到学芸員よりBertram D. Wolfe, "Diego Rivera: His life and times." Alfred・A・Knopf, 1939.こそが、その画集ではないかとの指摘があった。〔註4〕そこには、リベラのパトロンであった、ジョン・D・ロックフェラー・ジュニア夫人を通して、ネルソン・A・ロックフェラーからの依頼で制作された、RCAビルの壁画に関する記述がある。p.361に、シャーンの名を世に知らしめた代表作《サッコとヴァンゼッティ》(テンペラ、水彩・カンヴァス、1931-32年、ホイットニー美術館)がきっかけでアシスタントに抜擢されたことが記されており、さらに、本書において前述の「皮肉な諷刺画」を確認できるのだ。図版番号120《Rivera and Rockefeller ("Reconciliation")》, by Charles Goeller (図1)である。この諷刺画は、RCAビルの壁画をめぐる騒動を紹介した『ワールド・テレグラム』紙に掲載されたものである。〔註5〕このことから、阿部の記憶がある程度正確であることが判明した。

本書は、1943年に改訂版が出版されているが、ロックフェラーとリヴェラの諷刺画が掲載されているのは1939年の初版本のみであり、阿部に贈られた画集がこの初版本であったことは確実であろう。

この壁画は、主題や様式をめぐり、紆余曲折を経て完成するものの、レーニンの肖像が描きこまれたことで、依頼主をはじめアメリカのメディアから非難を受け、公開されることなく破壊されてしまった。〔註6〕

シャーンは、写真・ポスター・挿絵など、たくさんの人々の目に触れるグラフィック・アートを数多く手掛けている。そのことから、シャーンの画風に強い影響を受けた日本のアーティストとして、粟津潔や和田誠をはじめとするイラストレーターが多いのは周知のことだが、阿部は画風や様式というよりも画家であるシャーンの人となりに興味を持って、記事を執筆していたように見受けられる。

1960年、62歳のベン・シャーンは日本にひと月ほど滞在した。国際グラフィック・アート協会からの依頼で、日本の版画家達の作品を見てくる、という用件以外は全く私的な旅行だったらしい。〔註7〕藝術新潮の依頼で、4日間の京都・奈良旅行に密着してインタビューをした記事が同年の同誌5月号に掲載されている。シャーンは、愛用のライカを片手に街なかを歩き、スナップ写真を撮り続けた。2012年に開催された「ベン・シャーン展」では、フォッグ美術館が所蔵するシャーンの写真群のなかで、来日した時に撮影した写真の調査が、福島県立美術館の荒木康子氏と神奈川県立近代美術館の李美那氏によって行われ、シャーンの目を通して浮かび上がった日本の姿が明らかになった。〔註8〕

阿部はシャーンの心を捉えたものが、名もない画家が描いた名画の贋作であったり、素人彫刻家の作品や京都で生活する市民の姿だったことを詳細に記し、夢中でシャッターを切るシャーンの姿を、自身のフィルムに収めている。〔註9〕

日本のアーティストたちはこそってシャーンのもとを訪れ、「ベン・シャーン詣で」〔註10〕と言われるような盛り上がりを見せる。粟津潔や和田誠らは、自らの作品を、シャーンに見てもらったという。〔註11〕また、京都で版画家の浅野竹二の版画を見たシャーンは浅野のアトリエを訪問し、浅野の優れた職人技の名所絵と、人間への関心を描く創作版画とを融合してはどうかと進言している。〔註12〕つねに社会的弱者に目を向け、制作を続けていたシャーンと意気投合をした浅野は、シャーンの進言に従って画風を変容させた。その5年後にメキシコで個展を開き、ニュージャージー州にあるシャーンのアトリエを訪ねたときにはお互いの作品を贈りあっている。

このように日本のアーティストたちと交流を重ねてきたシャーンであるが、当館に収蔵された《ペンを持つ手》(図2)は、シャーンから阿部に贈られたものである。日本の画材である墨によって、「for Nobuya Abe in friendship and gratitude Ben Shahn apr 1960」というメッセージが添えられており、その友情の深さを伺わせる。阿部はシャーンが「日本で、ヘブライ語の印を造り、デッサンに押ししてくれたのを覚えている。」〔註13〕と回想する。シャーンは京都で、自分自身のルーツであるユダヤ教典に用いられているヘブライ語を構成する22文字を刻んだ印章〔註14〕を制作した。京都の老舗旅館である俵屋旅館に滞在している時に、書画の落款に興味を示したシャーンは、第11代目当主の佐藤年氏から印判店「田丸印房」を紹介されて来店し、自らデザインを施したのだ。それ以降の作品において、しばしばこの印章を好んで用いている。シャーンは、ユダヤ教の家庭に生まれ、物心がつくとすぐにヘブライ語のアルファベットを学び、祈祷書を見ながらこれらの文字を紙に写していた。さらに、幼少の頃よりリトグラフ工房で石に文字を刻む訓練を積んでおり、レタリングがシャーンの造形感覚のルーツであることも、印章に関心を持ち、制作を依頼するきっかけであったと考えられる。

シャーンの文字のデザインへの関心の高さは、晩年、『文字をめぐる愛と喜び』(美術出版社、1964年)を出版していることから明らかである。詩画集を制作する際には、挿絵を描くだけでなく、その本の内容に合わせた文字をデザインして画面を作り上げている。「ラブソネット・シリーズ」(1964年、水彩・紙)では、ルイス・ウインターメイヤーが選んだソネット(14行詩)を、線の細い美しい文字でもって表した。クリスマスの数え歌のひとつをテーマとした『梨の木にとまるヤマウズラ』(1948年)という絵本では、挿絵と文字のみならず、楽譜までをシャーンは手がけている。

さらに、ここに描かれたペンを持つ手という主題にも注目したい。最晩年に制作した版画集『一行の詩のためには…:リルケ「マルテの手記」より』に収録されたリトグラフのひとつである《一篇の詩の最初の言葉》(1968年、リトグラフ・紙)にも、本作と同じ主題が描かれている。この『マルテの手記』は、プラハ出身のドイツ人詩人ライナー・マリア・リルケの思索を綴った私小説であり、シャーンが20代のときにパリの古本屋で出会ってから、生涯を通して愛読し、人生の指標とした重要な一冊なのだ。あらゆる表現のはじまりは、手に持ったペンから生み出され、形となっていく。このテーマが描かれたデッサンが贈られたことから、画家である阿部に対しての敬意をうかがうことができるだろう。

シャーンは「旅をする時いつもなんの予備的な知識ももたず、まずその国に入り、民衆の生活を通し、自分の皮膚で感じるとするやり方」〔註15〕で理解を深めたあとに、書物を通してその国について学ぶという。しかしながら、シャーンが日本を訪れたのは、1957年2月から58年2月にかけて『ハーパーズ・マガジン』誌に掲載された、アメリカの水爆実験で被爆した日本のマグロ漁船、第五福竜丸事件を題材とした記事の挿絵を担当していたことも関係しているといわれている。自国が引き起こした悲惨な事件に強い関心を寄せ、怒りを覚えたシャーンは、1960年にこの挿絵の数々を下絵にしてテンペラ画を制作し、科学技術の向上とともに必要となる倫理観について常々考えていることを、阿部に話している。

1960年10月半ば、阿部はグッゲンハイム国際賞審査委員のひとりとして、ヨーロッパからアメリカへ二度目の旅をした。その際に、シャーンのアトリエを訪ねている。『藝術新潮』1962年2月号の記事では、偶然にも阿部と同じく1960年に渡米し、ニューヨークで仕事のあった若手芸術家の河合勇も一緒だったと記録している。河合は、1951年に福井県で行われた北美文化協会の阿部展也の講習会を受講し、強い影響を受けた画家である。〔註16〕

アトリエの訪問ではあったが、作品のことを話題にしたのかということそうではなかったらしい。「私達は彼の作品について、全く何も話をしなかつた。というより話す



図2 ベン・シャーン《ペンを持つ手》  
1960年、墨・紙、新潟市美術館蔵

註13 阿部展也「ベン・シャーンと第五福竜丸」『藝術新潮』1962年2月号、pp.88-91。

註14 'SPIRITUALITY AND THE HEBREW ALPHABET'  
Frances K.Pohl, 'Ben Shahn, with Ben Shahn's writings.'  
Pomegranate Artbooks, San Francisco, 1993, pp.150-156.

註15 阿部展也「ベン・シャーンと第五福竜丸」『藝術新潮』p.89。

註16 土岡秀一「河合勇論 一その原像と展開を中心に」  
『河合勇展』福井県立美術館、1996年、pp.4-6。

必要のないほど明確な主題であつた。」そこに並べられていたのは、ラッキードラゴン(第五福竜丸)・シリーズを主題とした作品3点であつたのだ。

そのほかに記述されたことといえば、シャーンのユーモラスな一面や、車に乗って迎えに来てくれたこと、父親が大工であつたことから、近代的な大工道具がそろっており、フレームやパネルなどすべて自分の手で作っていたことなど、阿部は作品以上にその人柄や人生、そして画家としてのエピソードに触れている。

1969年3月、シャーンの訃報をイタリアで耳にした阿部は、さっそくペンを執った。イタリアやアメリカの新聞各紙によるベン・シャーンの訃報に関わる記事の内容が判然としないことに着目した阿部は、シャーンの死因について持論を展開した。その死因を、胆嚢にできた癌なのではないかと推察しているのだ。水彩のひとつであるグアッシュを好んで使うことにより、イーゼルに立て掛けるのではなく、画面の上にかがみ込むようにして制作したために胆嚢を圧迫し、悪くしたという説を提示したのだ。シャーンとの思い出を振り返りながら、その死にすら、最期まで画家として生きたシャーンの勇姿をみようとしたりしたのかもしれない。

#### まとめ

阿部展也が見つめたシャーンは、市民ひとりひとりに寄り添いながら描き、ともに生きる画家としての姿であつた。「私は、シャーンと議論する立場にいない。できるだけ注意して彼の言葉を受けとめるのが私の役割りである。」〔註17〕。シャーンは、戦中から戦後の激動の時代と真摯に向き合い、ときに政府を批判し逮捕されることもあつた。阿部はシャーンと交流を重ねるなかで、その作品や表現方法について考察を重ねるよりも、シャーン自身を知り、語るからこそが、作品理解に繋がるものと考えていたのかもしれない。阿部の観察眼が描き出すシャーンからは、正義感にあふれ、親しみやすく慈愛に満ちた人間性が何よりも先に浮かび上がってくる。本稿を出発点として、阿部展也による同行取材の記録や、撮影した写真類について明らかにすることを、今後の課題としたい。

(こやの・あゆみ 新潟市美術館 学芸員)

#### 参考文献

- ・ Bertram, D. Wolfe, "Diego Rivera.; His life and times." 1939, Alfred · A · Knopf, 1939
- ・ 阿部展也「ベン・シャーン雑記」『BBBB』1950年3月号
- ・ 阿部展也「市民画家のみた日本」『藝術新潮』1960年5月号
- ・ 瀬木慎一、粟津潔「作家研究 ベン・シャーン」『美術手帖』美術出版社、1961年
- ・ 阿部展也「ベン・シャーンと第五福竜丸」『藝術新潮』1962年10月号
- ・ 『現代美術 第一巻 ベン・シャーン』講談社、1992年
- ・ Frances K.Pohl, "Ben Shahn, with Ben Shahn's writings", Pomegranate Artbooks, San Francisco, 1993
- ・ レム・コールハース著、鈴木圭介訳『錯乱のニューヨーク』筑摩書房、1995年
- ・ 『河合勇展』福井県立美術館、1996年
- ・ 『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト写真、絵画、グラフィック・アート』美術出版社、2012年
- ・ 『浅野竹二の木版世界』府中市美術館、2017年
- ・ 『阿部展也—あくなき越境者』新潟市美術館／広島市現代美術館／埼玉県立近代美術館、2018年

註17 阿部展也「市民画家のみた日本」『藝術新潮』1960年5月号、p.65。